

終戦の日の私

「戦争が済んだ。戦争は終わった。」

井戸の前に立ちながら、呪文の如く繰り返していた。

戦争終結への思いは複雑な思いであった。

ひんやりとした風が竹林の中をよぎる。

深い井戸であった。釣瓶つるべの縄を、一手、一手確かめるように力を込めてたぐった。

なみなみと汲み上げた桶の水をバケツに返す。溢れた水は足元を濡らし心地よかった。

井戸の守り木の如く、数百年は立つ檜かしの木があった。周りは深い雑木林と竹林におおわれて、冷たい風が、坂下から吹きあげてきた毎日、五衛門風呂に水を満杯にして湯を沸かすのが私の役目であった。

天秤棒の両端の鉤かぎにバケツを提げ肩に担いで、井戸と風呂場を四、五回往復した。

その重さは私の肩に食い込んだ。

井戸の下側に住む友達の陽子ちゃんが、道のない竹林の中を息を弾ませながら駆け上がってきた。

「戦争に負けたよ！悔しか！はがいか！」

泣きはらした陽子ちゃんの、ほほには大粒の涙が。拳を握り締めて宙に振り上げた。

その姿を見つめ、不思議に何故か、私は涙が湧かなかった。

戦争終結の思いは複雑であった。

「戦争は済んだのだ。」

複雑な気持ち、残念な思いはしたが、ほっとした安堵感も強かった。遠い明日に何か明るい光を見たような期待感の方が強かった。

時折竹林は風を呼び陽子ちゃんの、涙で濡れた頬を乾かしていた。

一二、三歳の幼い少女の終戦の日の回想である。